The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	<30周年記念論文・感想文> 私にとっての30年のデザイン史
Author(s)	南原, 七郎
Citation	デザイン理論. 1988, 27, p. 36-44
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/52698
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

私にとっての30年のデザイン史

南　原　七　郎

執筆に際して1962年の「デザイン理論」第１号に書かれた私の敬愛する初代会長井島勉先生の論文〝現代デザインの地盤〟を初心に帰る精神の立脚点として読み返した。「…デザインが生活用具に即して見出されるという理由よりも先に，デザインを求める現代の美意識の本質によるのである。…より根源的なる事態として，現代の生と美意識の内面的な結びつきを想わざるを得ないのである。」

学会創立は1959年11月７日であるが，デザイン理論第１号の刊行された年から1988年の現在までデザインの社会の根底をなす社会体系が大きく変化したことを認めざるを得なくなってきた。それはとりもなおさず現代の〝生〟とそれによって生じた〝美意識〟の変化でもあろう。

１号の刊行年の時代の状態をフィルムを巻きもどして見たいと思う。国外的には，キューバー危期，ホットライン，原子力潜水艦84日世界一周，通信衛生テルスター，通信用静止衛生の実現，国内的には岩戸景気の中にあり，JETROの発足，貿易自由化率88％に，スーパーマーケットの発達，流通革命論，問屋無用論の発生，ムウムウ，ツイスト，ボサノバ，消費者は王様という言葉が流行，マリリンモンローの死亡が話題になり，植木等が〝無責任男〟の時代をつくり，17才の吉永小百合がビッグな青春スターに脱皮，中尾ミエ（17才），伊

東ゆかり（16才），園まり（19才）が新三人娘として売り出し，建築界ではヴァナキュラー派が生れ，シドニー・オペラハウスが出来，日本では東洋一の若戸大橋（2068m），日本最長の北陸トンネル（12,869m）が完成，住宅用アルミサッシ発売，宅地開発の遠隔化，通勤地獄の発生，巡航見本市船「さくら丸」進水，佐世保重工で世界最大のマンモスタンカー「日章丸」（13万トン）が進水，戦後日本初の国産飛行機YS 11（日本航空機製作）が初飛行に成功，国産初の大型電子計算機開発，第1回小菅ファニチャーデザインコンペ，T.Vの普及率48.5%に，G.Kでは電動オルガンT型（日本楽器），又量産住宅研究としてコアーと呼ばれるスキーロッジ（小松化成）を製作，グラフィック界では「コンセプチュアル・アート」がH.フリントによって主張され，オリンピック東京大会公式ポスター第2号が発表，d.亀倉雄策，フォトデレクター村越襄，フォト早崎治で我国始めてのグラビア多色刷であり，日宣美「私の提案」〝私たちは新しい国旗をこのように考えたい〟（有本功＋永井一正＋白井正治）に対し太政官令ですでに決まっているとの政府の反論登場，この頃シルクスクリーンによる言語を語り初めた時代であった。ファッション界では〝高級プレタポルテ中心時代が終り，イージーオーダー対既成製服＝4：6となり，レナウン・ルックが創立した時代であった。

このようにあげて見ると未だ頂上を見きわめるどころか，今までの定められた道を息せき切って登ろうとする姿と危険な破壊の世紀末に近づくような姿とも見える。

だがこの30年間は頂上を見た日本のデザイン界が前に横たわる大きな「生」に関する未解決の問題を発見したように私には思われるのである。それは私にとっては極めて重要な問題だと思っている。1つは貧しい庶民の為めの幸せの向上を目指したバウハウスの路線上に乗っていた世界のデザイン界に，庶民の裕福さと生活向上にともなう今までのデザインの方向に批判が生れ，私にとって過渡期において，私の考え方がもやもやしていたのはこの問題だったのかと

ハッと目の覚める思いをさせられた点であり，これがポスト・モダンという新しい「美意識」を生む苦悩につながるのである。第2は，I.Dの世界で地球上に溢れた各国，各民族の手でつくられた工業製品が「生」の変化による「美意識」の上で，個性を失った同じ顔の国際建築のようであっていいのだろうか。又この過剰生産を制禦し得られるのか。等の色々の問題がグローバルな視点から国際的にも問題が提示されたことである。あれ丈庶民のための幸せのためにデザインされた製品が地球上に溢れ出て，時には害をも及ぼそうとしているのではないかという問題である。第3は，「美意識」の根源の点で，日本人は，あれはドイツ風だ，イギリス風だ，フランス風だ，イタリア風，北欧風等と言って他国の民族のContitutionを見分けるが，日本民族の根底を形成しているcontitutionの研究を確立したであろうかという問題である。これを学究的に確立しない限り21世紀になれば日本は民族の主体制を持たないままに諸民族からべっ視されるであろうと危惧するからである。

それにもかかわらず「東京をはじめ大都市に〝無国籍空間〟とでもいうような奇妙な建築物やインテリア・スペースが急増している。多くはコマーシャル・インテリアと呼ばれる商業施設で，設計は外国人建築家やデザイナーが担当し，その先鋭的でショッキングなデザインが企業商品のイメージを決定していくような方向性を持っている。ここ数年，エスニックという言葉がモードや音楽の領域にとどまらず，食文化やメディアや都市の問題の全ての底流をなす現象とみなされ，一種の流行語としてもてはやされてきた。エスニックとは「人種」「民族」「国民」といった意味を持ち，エスニックブームには，さまざまな民族性を横断していくという志向が込められていたわけだが，これからはこうした言葉は廃れ，無国籍性，あるいはインターカルチャー（混血文化）といった言葉がキーとなってゆくのであろう。エスニシティー（人種性）という概念が新しい段階に入っていると言い換えてもいいかも知れない。〝国にも，民族にも，東洋にも，西洋にも属さない新しい地〟ロンドンの隣に東京があり，

東京の隣りにパリがあり，パリの隣りにアラビアがあり，ニューヨークがインド洋に浮んでいるような空間を浮上させようとしている。これは歴史（モダン）の時代に対して地理（ポストモダン）の時代の文化と名付け，大地の束縛を離れやわらかい地球の上に浮ぶ地，国境や地理という概念を喪失してゆくわれわれの精神の新しい風景がそこに鮮かに暗示されている。」と評論家伊藤俊治はいう。この思想は日本人の根源的なる事態から見るならどう解決すべきであろうか。これに対して，イギリス人は「ブリティッシュ・スタイル170」展で「ユートピアとライフスタイル。この２つのものはイギリスが現在まで文化形成の中心にすえつづけてきた基本的な概念です」と主体制をもつ自己の哲学を語っている。ドイツ連邦共和国の建築家トーマス・ポイカーは，ルイ・カーンやアルバー・アート，丹下健三らと親交をもつ方だが，彼は「都市は家のようでなくてはならない。家は都市のようでなくてはならない。」と自己の民族として哲学を述べている。又イタリアのデザイナーのアンジェロ・コルテーズィは「デザインの技術的な役割は，モリス，ドイツ工作連盟，デ・スティル，ロシヤの構成主義，イタリアの未来派，バウハウス，コルビジェを始めとするフランス人等の運動といったように，芸術運動の中で発展してきたというのは万人の認めるところです。ただもう一つデザインに関する大論争は，戦後イタリアとドイツで行われてきたということを忘れてはなりません。さらに1968年以後はイタリアだけで続けられたのです。又ドイツではULM（ウルム）造形大学の中で特権的に保持されてきたのに対し，イタリヤではドムスを主催したジオ・ポンティを始めとする数人の優れた人物のおかげで論争は公開の性格が強く，デザイナーや，ジャーナリスト，産業界が参加しました。その証拠に1956年に設立されたA.D.I.（イタリア・インダストリアルデザイン協会）は今も多くのインダストリアルデザイナー，デザイン評論家によって構成されている。1954年に設立されたコンパッソドーロ賞は産業，デザイナー，批評家と多岐にわたり表彰してきました。又，1950年以来今日まで論争の場として40以上の専門誌があ

り，それがさらに週刊誌や日刊誌でも語られているという状況も忘れてはなりません。…イタリアは個人の表現の発揭が大変盛んな国で，そこから沢山の詩論（自己のデザインの創造理論か？）が生れました。…これはデザインの歴史を幾つかの世代に分けて考えようとするものです。どの世代に属するかはデザイナーの年令とは関係なくデザイナーの成熟期，意識や表現力が一番高まった時期が考慮されています。…デザインというものは非常に複雑なもので社会で行われる文化論争から多くの要素をとらえ，それをうまく統合し，国境を越えた作品を作らなければならないのですから，デザインは職業ではなく，知的活動であり，他の創作活動と同じように批評を行う必要があります。そうして現在その時代社会を背景として発生したデザイナーのグループを第１世代，第２世代，第３世代，第４世代と分けています。…デザインはその役割を技術的な側面と，モラルの側面にまで広げていると考えなくてはなりません。技術的な側面は幾つにも考えられますが，３つのカテゴリーにまとめて考えると，空間のカテゴリーがあります。アメリカの土壌での空間（車）が適合する国と，しない国があります。第２のカテゴリーは住居とオフィスと都市を，現在は全く無秩序に収められているテクノロジーとテクノロジカル装置の量に応じて新しく整理しなおすということです。即ち Coos のエントロピー論です。第３のカテゴリーは行動に関するものです。今世紀になってから，人間に絶え間なく与えられてきたサービス機器のせいで，人間はその行動の多くの部分を変えてきました。住居，オフィス，都市に於ける行動が変化してきました。近代19世紀の巨匠たちがその時代の問題を系統化するために行ったのと同じように，我々も現代のアテネ憲章を再形成するために必要な研究と分析を行わなければなりません。道義的モラルの側面については，私は既に Memorandum デザインで部分的に検討しましたが，今日社会が直面する大きな問題に対してデザインが担うべき集団意識のレベルにかかわるものです。先づあげられるのは，第１に自然との新しい関わり方です。今日では人間は自然を破壊することも，保護す

ることも，改善することも出来るのですから。第2には生活の質という言葉（試験管ベービー等，平等でない人間の誕生を含む）の意味を意識するということです。第3は文化の問題，つまり真の平和の文化を持たなければいけないということです。即ち差別的文化とは全く違った規律を見付けなければならないのです。そんなことはデザイナーの仕事でないということは出来ます。これらの役割は過去には哲学，宗教，政治が担ってきました。しかし今日では，デザイナーがやらねばならないと私は思うのです。何故ならばデザイナーは社会—生産—地上で生産される財産の消費—この接合点にいるからです」又「日本について多くのことを学ぶことができました。日本は我々イタリア人にとって友であると同時に〝神秘な国〟でもあります。私に組織の効率性やヒエラルキーシステム（ピラミッド型に構成される階級組織），また禅の思想からくる師匠に対する大きな尊敬の念といったものを理解することができました。」即ち日本国内にデザインを批評検討する場がないのかという問いかけである。「何年代から何年代にかけてこのような社会思想が生れ，この上に立ってこのようなデザインが生れた」と順々と，「生」と「美意識」の変遷を自国のデザインについて分析して述べたフィンランドの工業デザイナー Hannu Kahonen ハンヌ・カホネンの講演を聞いたときの感銘を私は思いだす。この分析は思想があってデザイン，芸術が発生するという，当然の理論でありながら，われわれは時として忘失していた，井島勉初代会長，二代目河本敦夫会長の論を思い出さずにおれなかった。われわれ学会人は，永々と引用したイタリアのデザイナー・アンジェロ・コルテーズイのいう如く論争を重ねたであろうか。62年11月21日 NHK 教育 T.V. 海外ドキュメンタリー「岐路に立つ現代建築シリーズ。日本・禅と建築」B.B.C イギリス製作では，コルテーズィ氏の禅のヒエラルキーシステムに対し，別の禅の解釈として，日本人の都市の秩序を破ったとイギリス人が考える安藤忠雄，高松伸，葉祥栄，磯崎新等のポストモダンといわれる建築を容認して苦情をいわない施主，周辺住民に対して，日本人には何か

特別なポストモダンの建築を受け入れる土壌（国民性）があるのではなかろうかと考えるている。彼等イギリス人は現実的に日本人の在来の生活を観る。狭い長屋の露地の家の前では鉢植の木，朝顔をならべて大自然を想い，狭い土地に立つ建築の小さな天窓から少ししか見えない小さな青空を見て広大な地球上を覆う大空を想い，一葉落ちて天下の秋を知る禅哲学が，日本人の中に内在しているのではないだろうかと，不思議な無秩序の中に甘んじる日本人の根源的なる事態とは何かを読もうと苦労している。

「デザインはオモチャ箱をひっくり返したようなものではない」とは1960年世界デザイン会議東京の基調演説でハーバート・バイヤーが述べた言葉であるが，日本人の根源的なる事態，日本人の contitution とは何であるのか。これを追求したデザインの学会は，はたして今まであったであろうか。又1988年1月4日新聞紙上で福井謙一氏と梅原猛氏の「文明の歴史と未来」の対談の中で「日本人に創造性があるのか」という話題があり福井氏が「〝ネーチャー〟などの外国の科学誌を見ると，日本人は自らコピー・キャット・シンドロームに陥っているが必要な金も出さないでいて創造性がないなどと自己批判するのはとんでもない話だと言っていますよ」という話がでている。「芸術新潮1988年7月号」に「ここが違う韓国と日本」によれば，生活の衣食住についても習俗，作法，環境観についても両民族は大きく異っているのを見る。これは韓国のみでなく中国の北方漢民族，江南（呉蜀越），少数民族，又イギリス，フランス，イタリア，スペイン，北欧世界各民族共各自の体質（contitution）をもち，そのベースの上に立って近代デザインを模索しているのであり，他国の contituuion は判っていても，自国日本の contitution が理解できないようでは，これから21世紀へのデザインは出来ないのではないかと考えたりする。この日本の contitution とは日本の〝過去の様式〟を決して指すものではない。様式をつくり出す前の民族の美の好悪の基盤を形成する体質，根源的なる事態を指すものである。これが端的に表われるのは，中央アジアで発達したと思われる日

乾レンガ積建築工法がシルクロードを経て漢民族の磚積工法に，インドに行き焼成煉瓦造，石積工法に，同様のものがエジプトより，ヨーロッパに波及し高い巨大な建築となり，現在見るような高層鉄筋・鉄骨建築になった。一方日本では木材で家をつくり火事，腐朽，を繰り返しながら高い巨大な永久的なモニュメントとなる建築を創造することは考えの外にあった。そんな体質をもつ日本の建築家は高層建築となるとその体質外のデザインのためどうしてよいのか判らなくなり外国誌を見るようになる。即ち真似でありコピーである。もし日本人が日本の contitution はこれだと解決したなら，あらゆるデザインにも自信をもって創造できるであろうし，日本の哲学の上に立つ主体制をもったデザインが初めてつくられるであろう。衣服にしても，インテリアにしても同じである。神戸の県近代美術館の増田洋氏は２，３年前インドで美術又は美術館の国際会議に出座した際，特にインド側から contitution の点について多く述べていた。Contitution という言葉は国際的に市民権を得ているのではないかと私に話していた。今やこれを基盤にしなくてはデザインの国際性，特に建築，インダストリアルデザインは語れなくなる事態に遭遇するにちがいない。産デ振発行の Design News 1986特集 Role of Design Ⅱ（デザインの役割Ⅱ）―デザインと国際化―の中で，アメリカのアーサーＪプーロスは〝グローバル・バナキュラー〟の中で「製品はどこの国で生産されようと，世界のどこの人間も共通に持っている要求に応じられるようなものになっている」とし，フランスのエリアンヌ・ド・ヴァンドゥーブルは，〝グローバリゼイションとデザイン・プロモーション〟の中で，グローバリゼイションの課題で「工業技術の小型化と標準化が世界の中に製品のある程度の均質をもたらしている」とし，世界市場でのマスプロ製品の混乱過剰生産を懸念している。デンマークのデザイナー，ヤン・バーンセンは〝サブカルチャー（異種文化）の世界に適したデザイン〟。インドのバーベンアハマド女史は〝デザイン・エトス（デザインの人間社会の気風，習慣を形成する原点となる精神）のアイデインテイ（主体制）〟と多種

民族国家でのデザインを考えている。それに又日本人のデザイナーはグローバルに地球全体と人類について考える思考が足りないように思われるがどうであろうか。あれ丈海外旅行が盛んに行われているのにである。それについて1987年の自3回国際デザインコンペテイション〝水〟に対してIITグループは「海上交差道路」を出品し，日本からは「灯篭流し」をデザインした。われわれはここに〝水〟に対する人類的な考察の基盤が日本人デザイナーの場合如何に狭いかが問われる結果になった。第4回はテーマは〝火〟である。如何なる考え方の差異が現われるだろうか。

この30年間にデザインの世界にも大きな変化が起っているのを感ずる。私達学会人としても，これらの問題を解くべく対処して行かねばならないと思う。